

2022年度「酪総研シンポジウム」を開催 今こそ飼料の国産化を！ ～それぞれの地域で出来ることを考える～

雪印メグミルク株式会社 酪農総合研究所 課長 下村 善計

雪印メグミルク(株)酪農総合研究所(戸邊誠司所長)は、2023年2月2日に札幌市及びWEBで「酪総研シンポジウム」を開催しました。

本シンポジウムは、酪農乳業を巡る諸問題をテーマに取り上げ、情報共有を図るとともに、私どもの調査研究内容及び諸活動を多くの皆様にご理解頂き、その普及を図ることを目的に毎年開催しています。

今回は、約260名に参加申込み頂き、「今こそ飼料の国産化を！～それぞれの地域で出来ることを考える～」をテーマに講演4題と、総合討議では雪印種苗(株)事業本部トータルサポート室の龍前直紀室長を座長に迎え、酪農学園大学の相原晴伴教授から情報提供頂きました。

本稿では、紙面をお借りし、講演等の要約をご紹介します。「酪総研ホームページ」にシンポジウムの動画等を掲載していますので是非ご覧下さい。

【講演1】

「国産濃厚飼料の利活用について」
東京農工大学 大学院農学研究院
教授 青木康浩氏



(1) イアコーンサイレージ (ECS)

ECSは、トウモロコシの「たわら(雌穂)」を収穫、細切し密封貯蔵したもの。可消化養分総量(TDN)は約80%、デンプンの乾物中含量は55%である。ECSの生産体系には、①TMRセンターが大規模な圃場を効率的に運用して生産、②耕種農家が輪作作物としてトウモロコシを導入し、コントラクターに収穫を委託、③酪農家自身が栽培し、コントラクターに収穫を委託というパターンがある。北海道では、収穫に専用アタッチメント(スナッパヘッド)を装着した大型の自走式フォレージハーベスタが利用される。都府県向きの汎用型飼料収穫機に装着するタイプのスナッパヘッドも開発されている。

ECSの生産コストをTDN 1kg当たりで示すと、2014年実績として上記①で49.2円、②で52.0円であり、資材費高騰を加味しても、配合飼料約127円及び単体飼料用トウモロコシ工場渡価格(2022年10月現在)82円を下回ると試算される。

(2) トウモロコシ子実(ハイモイスターシェルドコーン(HMSC)、乾燥子実)

子実は、コムギなどの収穫に用いるコンバインにスナッパヘッドを装着して収穫する。HMSC及び乾燥子実の特徴を理解した上で利用体系を選択する。従来に比べ省力的に調製できる「フレコンラップ法」が開発されている。

(3) 飼料用米

飼料用米による輸入穀類の代替効果について、多くの研究で実証されている。例えば、圧片トウモロコシや圧片オオムギの代替として、飼料中に25%(乾物比)の破碎粉米を含むTMRを給与すると、分娩後10週までの泌乳成績は慣行TMR給与条件と差がなく高水準であることが実証されている。最近、粉碎工程や梱包時の脱気が不要な粉米サイレージ調製法の有効性が示されている。

【講演2】

「気象リスクを分散する
自給飼料生産の取組み」
大樹町 村崎隆一氏



2013年の規模拡大を機に、牛も人もゆとりある経営の両立を目指した。新牛舎の収容頭数が倍になったため、限られた土地から自給飼料の量・質ともに最大限確保し、また近年の気象リスクを分散し生産性を高めるため、牧草は多回刈りが可能なオーチャードグラス草地とチモシー草地、トウモロコシは露地とマルチ、それぞれ2段構えに挑戦してきた。現在はチモシー33ha、オーチャード20ha、トウモロコシ露地19ha、